



なごや「聖歌」だより 9月号'09

祈祷書という「宝物」

祈祷書を見ながら、楽譜の準備をしていると、はっと驚く宝物に出会うことがあります。特に晩祷の祈祷文は、復活や祭日のテーマが、聖歌を作った聖人たちによってさまざまに解釈され、色づけされて歌われます。

最近気づいたのは、主日早課のポロキメンです。「起きる、復活するВоскреснуть」「王となるВоцариться」などが各調に見られ、主の復活が宣言されます。復活祭の「神は興き」が連想されます。やがて聖堂の中央で、復活の福音が読まれます。日曜日のテーマは「復活」です。短いポロキメンの歌ですが、「起きて」をはっきりと高らかに歌うことで、喜びの宣言の雰囲気を一層高めることができます。

残念ながら日本では省略されていますが、11個の早課福音の読みとセットになった11個のエクサポスティラリと福音ステヒラがあり、その日に読まれた福音の内容が、絵物語のように歌い上げられます。まさに礼拝の中で主の復活に出会える構成になっています。

9月の指揮当番

6日 マリア松島 20日 エレナ広石
27日 ピーメン松島

ズナメニイ研究会 2 第5回

9月19日土曜日 10時

ズナメニイ聖歌などの古い聖歌を調べてゆくと、正教会聖歌の原型が見えてきます。

第一点は、歌詞である祈祷文が「主」である点。単語のアクセントはもちろんのこと、各文の重要単語には目立つ、複雑なメロディが当てはめられていて、言語主体で音楽が付随しています。さらにスラブ語の楽譜を細かく見ていくと、「天」「神」などを表すことばには高い音が当てられ、「地に降りしとき」などには低い音が当てはめられ、音の高さで世界を構成します。

音楽の基本は八つの調(グラス)です。各調にはそれぞれ特徴的なメロディ定型があり、聖歌者は何百とある定型を記憶していて、その中から祈祷文(歌詞)に合わせて適当なものを選んで、組み立て、微調整して歌います。聖歌者には内容と音楽の深い理解が求められました。伝統は師から弟子へと教えられ、教会ごと、修道院ごとに幾分異なる歌い方が育まれました。ですから、同じトロパリでズナメニイと書いてあっても、写本やそれを採譜した楽譜によって、さまざまです。

「新聖堂」にむけて。

聖歌練習

♪名古屋：9月13日(日)代式後 基礎練習。

来年早々の成聖式に向けて、「晩祷」、「成聖式」、「主教聖体礼儀」の練習を始めています。

8月は代式祈祷後の練習日に、「イスポラ」と「すでに真の光」を練習しました。歌いやすい密集(へ長調の編成)に変えました。「すでに真の光」は領聖後で気がゆるみがちなポイントです。注意力維持が求められます。

そのほかポルトニャンスキーの「ヘルビム」の音を確認しました。きれいな曲ですが、難しいです。「だいたい」や「なんとなく」では合いません。よく聞いて、ぴったり気持ちのいい音をつかみます。

毎回のことですが、「聞く」ことが第一です。不思議なもので「聞いて合わせよう」としなければ、きれいなハーモニーは決してできません。練習の中でつかんでゆきます。

♪半田：9月9日(水) 11:45ごろから

19世紀以後、西洋和声音楽を取り入れるために、各調のメロディは簡単な2、3のパターンの繰り返しに単純化され、単旋律の多彩なメロディはなくなり、ことばへの着目も薄れてしまいました。カノンのイルモスにかつてのズナメニイの雰囲気が多少残っています。

ズナメニイのメロディ定型を日本語の歌詞にあてはめて歌う試みも行っています。その場合、歌詞のことばと音楽への深い理解が求められます。ただ機械的に日本語の歌詞をスラブ語のメロディに当てはめても、奇怪な代物になってしまいます。スラブ語の歌詞一語一語とそこにあてられたメロディを分析し、日本語の語順や性質を理解して再構成する必要があります。

日本教会には日本教会の170年の伝統があるので、もちろんそれは大切にしつつ、ズナメニイのエッセンスを知ること、より豊かに福音を顕す日本語の奉神礼、聖歌へのヒントとしてゆけるのではないかと思います。

ズナメニイ研究会では、リガで発行されたズナメニイの教科書を利用して、1調の特徴を学んでいます。次回はメロディ定型であるポペフキを調べます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameny/>

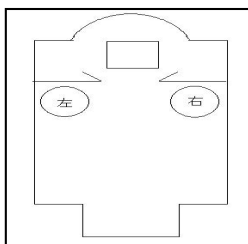
3. 歌い方のスタイル

祈祷文を礼拝の時、それを歌う(唱える)のがひとりか、複数かによって二つのスタイルに分けることができます。

一人で行うものには、司祭や輔祭の祈願、高声、聖書の読みなどがあります。複数が行うもの、すなわち「聖歌隊が歌う」ものは、さらに5つに分類されます。どのスタイルをとるかはティピコン(奉事規則書)に指示されています。

(1) アンティフォン形式

2つの聖歌隊がイコノスタス前の左右(クリロス)に立って、交互に歌います。右聖歌隊が聖歌や聖詠の句全体を歌い、左聖歌隊が次を歌います。両方が一緒に歌うこともあります。もともとステヒラや聖詠など、句が連なる歌に用いられました。大詠頌(Great Doxology)のような長い歌をいくつかに区切って左右交互に歌うこともあります。



(2) エピフォン(冠詞)ヒポフォン(附唱)形式

聖詠の各句に、同じ歌や句を「繰り返して」添える歌い方。エピフォンは句に先行するリフレイン、ヒポフォンは後に添えるリフレインです。

※たとえば、早課の主日カノンでは、「主や光栄は爾の聖なる復活に帰す」をイルモス以外の各讃詞にリフレインとして添える。

このスタイルはさらにふたつに分類されます。

(a) 誦経者が一人で聖詠の句を読み、そのたびに聖歌隊が同じリフレインを繰り返します。一方の聖歌隊が続けて歌う場合もありますが、両聖歌隊が交互に同じリフレインを歌うこともあります。

※たとえば祭日経を見ると、主宰の祭日の第3アンティフォンはこの形式で歌うように指示されています。誦経者が聖詠の句を唱え、聖歌隊は祭日のトロバリを繰り返します。

(b) 句とリフレインを両方も聖歌隊が音楽づけして歌います。ひとつの聖歌隊が歌う場合もあり、両聖歌隊が交互に歌うこともあります。

※たとえば、早課のポリエレイ後の「復活の讃詞」。リフレイン「主や爾は崇め讃めらる」を添えて、5つの「復活の讃詞」が歌われる。

(3) 応答形式(レスポンソリアル)

ふたつのバリエーションがあります。

(a) 司祷者や輔祭の祈願や高声のあとに、聖歌隊が与

えられたテキストを繰り返して歌う。一方の聖歌隊が歌う場合、両隊揃って歌う場合もありますが、会衆全体が一緒に歌うこともできます。たとえば連祷など。輔祭が祈願を唱えるたびに「主、憐めよ」「主、賜えよ」などと応えて歌います。

(b) 誦経者(ソロ)が聖詠の数句を読み、聖歌隊は第1句を繰り返す。左右聖歌隊が交互に歌い、最後に誦経者が冒頭第1句前半を唱え、後半を聖歌隊が答えて歌います。たとえばポロキメン。

(4) カノナルフ形式

ロシアの修道院で広く行われたスタイルで修道院聖歌の特徴。前述の応答形式と混同されがちですが異なる形式です。カノナルフは劇場のプロンプター(舞台のソデで役者にこっそり台詞を教える人)の役割に似ています。

カノナルフは歌の歌詞をフレーズごとに同じ音の高さで一本調子で唱え、聖歌隊はそれを聞いて、同じ歌詞を今度は音楽付けして歌います。

カノナルフだけが祈祷書を持って、残りの歌い手に台詞(歌詞のテキスト)を伝えます。大勢の歌い手が祈祷書を持たずに歌うことができます。もともと、ステヒラのように歌詞が次々と変化する歌に用いられましたが、今では大半の大聖堂や教区教会では熟練した聖歌隊が楽譜を見てすべてを歌うので、ほとんど実施されなくなりました。しかし聖歌への会衆参加を考えると、カノナルフ形式は再評価されるべきでしょう。

※聖セルゲイ至聖三者修道院の晩課では、カノナルフ形式が実施されていた。カノナルフの輔祭が左右聖歌隊の間を歩き来し、各ステヒラを先行して「まっすぐ」に唱え、続いて聖歌隊が同じ歌詞を歌う。聖歌隊が歌っている間に輔祭は反対側の聖歌隊の前に移動し、歌が終わるとただちに次の句を唱え、聖歌隊が続く。左右の動きがダイナミックな聖歌を作っていた。

(5) 聖歌隊が通して全部歌うスタイル

聖歌隊が最初から最後まで途切れずに歌う形。聖体礼儀の「ヘルビムの歌」、「信者の礼儀」以降の大半、晩課早課の常に変わらない歌(「聖にして福たる」)や大祭のある種の歌、儀式的な動作に伴って歌われる聖歌など。(※は訳注)

Johan von Gardner, *Russian Church Singing*, SVS

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料